

自主学習会

「日本の民俗を訪ねる」聞いて喋って楽しい会です

四街道市 宮川 脩

「日本の民俗を訪ねる」は毎月第二水曜日が活動日で会員14名の小所帯である。広辞苑によると民俗とは「人々の伝統的な生活文化、民間伝承、伝承文化」とある。

活動は上記の条件を1つでも満たせば十分なので内容や方法は多岐にわたり、毎回、様々な意見、見解が示され、話は次々と発展するので、司会者は交通整理に苦戦している。出席率は毎回90%以上で、聞いて喋って満足する楽しい学習会である。

月1回の館内学習と不定期な館外のフィールドワークで成り立っている。

館内学習の半分は宮田登著「民俗学への招待」で、日本の民俗学全般について学習する。残りの半分は各人が課題としているテーマについて発表し、議論している。

館外のフィールドワークは、県内外の民俗行事や博物館などの見学である。2015年には、4月に成田市取香地区の三番叟（千葉県指定無形文化財）を見学、これは側高神社の花見法樂に奉納される郷土民俗芸能である。11月には日本民芸館と国学院大学博物館を見学した。日本民芸館では、たまたま特別展「芹沢銈介展」もあり有意義であった。昼食は駒場の大学食堂でとる。流石東大、値段以上に充実した内容であった。

館内学習会に話を戻すと、民俗の学習会だけあって内容は多種多様、それぞれの好みも反映されている。たとえば宮本常一と菅江真澄に傾倒し、彼らの足跡を辿り発表する人。沖縄で勤務したことがあり、沖縄の生活文化、特に酒、食事、信仰などに詳しい人。諏訪大社および諏訪地方の縄文時代から現代の生活文化に詳しい人。古代の香取の海、特に鹿島神宮、香取神宮、その周辺の暮らしなどに造詣の深い人。羽黒山信仰や民俗芸能に精通する人。言語に詳しく古典や歌謡に詳しい人。地域の水運、陸上交通、神社仏閣の事に精通する人。そして筆者のように参加することに意義を認め、聞き役に徹している者。まさに民俗の縮図である。

ただ、この会の弱点は西国出身者が少ないことである。東海地方以西の出身者、生活経験のある人の入会を期待している。

